

## 188 <sup>しろやま</sup>城山10号墳(持給院古墳)

—石棺式石室を内包する終末期の円墳—

### 所在地

米子市淀江町稲吉

### 立地

淀江平野の東縁部に臨む城山と呼ばれる低丘陵の南側に位置する。

### 時期

古墳時代後期末

### 発見と調査

佐々木古代文化研究室による分布調査により、丘陵全体に13基の古墳が築造されていることが明らかにされた(文献3)。10号墳は墳丘の略測図が示され、全長62mの前方後円墳と考えられた。後円部平坦面で長さ2m、幅1.2～1.5m、高さ1.2mの「石棺」が存在することが確認された。

なお、10号墳と同一尾根上にある7号墳は、切石造りの石棺式石室を有する径22mの円墳であり、墳丘測量図と石室の実測図が作成されている(文献1)。

### 遺跡の種類

円墳か、中世城館跡

### 遺構と遺物

従来、全長62mの前方後円墳ないし前方後方墳と考えられてきたが、新たに測量図を作成し、現地確認を行ったところ、後円(または後方)部と考えられてきた部分の上半部のみが古墳であり、それ以外は、岩盤を削り出して切岸状に加工した中世城館の一部である可能性が高い(図1)。実態は、径20mほどの円墳と考えられよう。

丘陵の南端部を幅10m、深さ7、8mもの堀切で分断して墳丘を築くと説明されてきたが、後期古墳の築造方法としては異例なほど大規模であり、「後円部」、墳丘側面部、「前方部」前端部ともに極めて急傾斜である。くびれ部と考える部分もなく、前方後円墳とはみなし難い。前方後方墳という理解は、北側の堀切から続く犬走り状の平坦地に囲まれた範囲が方形を呈することによって、見かけ上の「墳丘裾部」が方形を呈することから解釈し直された結果であろう。

「後円部」西側で標高44m付近に崖崩れが生じており、その部分が岩盤であることが判明する。「墳丘」各所には角礫が露出し、あるいは散乱して、かつては葺石が全面に存在すると報告されたが、ほとんどが基盤岩であろう。中世の稲吉城が想定されている場所でもあり(文献2)、中世城館の遺構と重複していると思えばならない。

石室は、現状ではほとんど埋没して内部を観察することはできない。墳頂部が広く平坦であることを考慮すると、墳丘にも大きく削平が及んでいて本来の規模を失っている可能性も考えられる。

### 特徴と意義

古墳時代末期の前方後円(方)墳の可能性も考えられてきたが、円墳と考えられる。墳形の解釈が変わっても、保存状態の良い終末期古墳としての意義は変わるところはない。墳丘形態が円形であるかどうかは、現状では確かではない。多角形となる可能性もあるので、基礎的な調査が必要と考えられる。

### 現状と遺物

現状は山林であるが、県史編さん事業にともなう測量調査の際に荒れた藪が切り開かれ、遺構の観察が比較的容易になっている。出土遺物は知られていない。

### 文献

1. 出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』古代の出雲を考える6 出雲考古学研究会
2. 大川泰広編 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集(伯耆編) 鳥取県文化財保存協会
3. 佐々木古代文化研究室 1964『福岡古墳群』稲葉書房 (高田 健一)

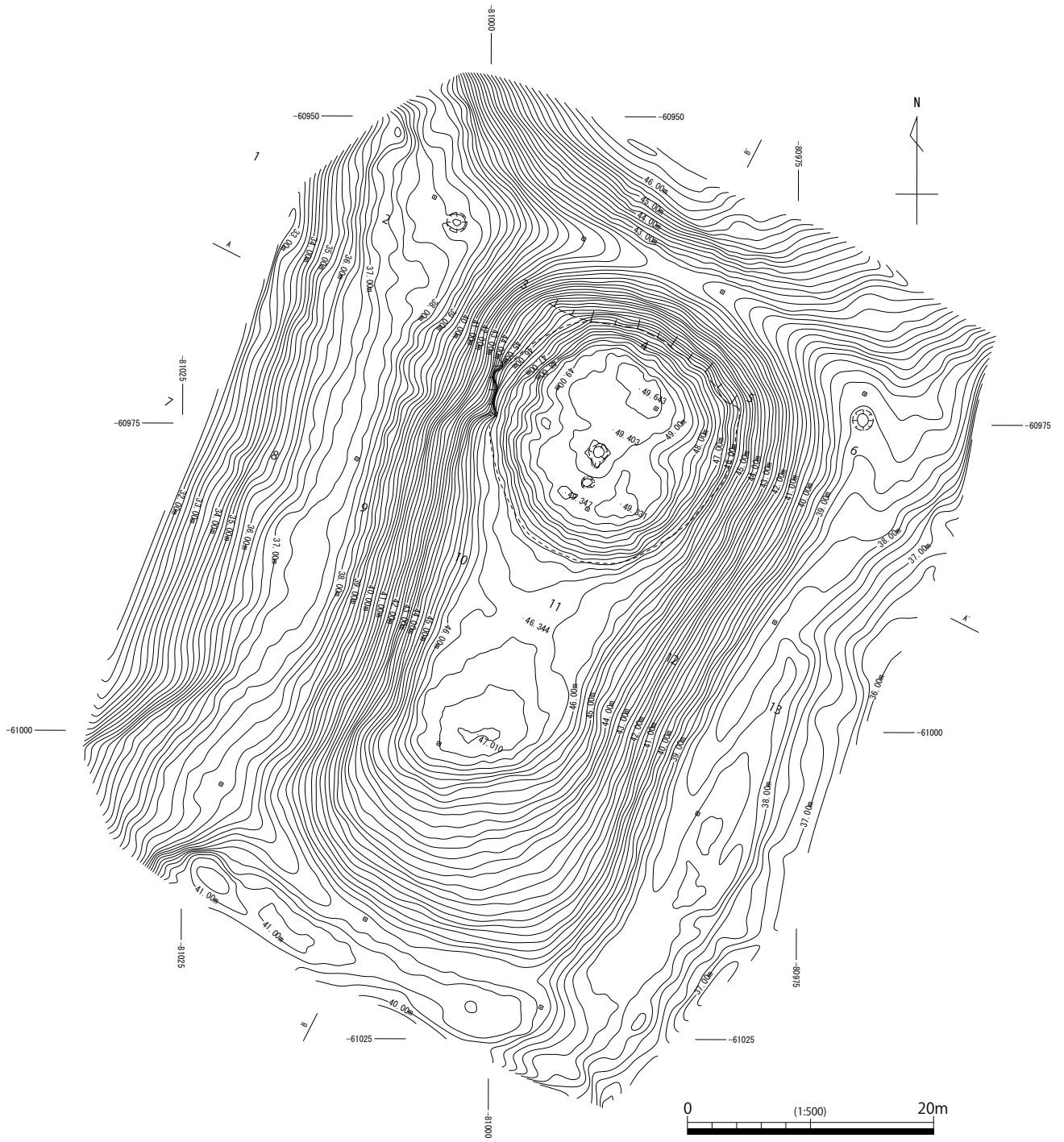


图1 城山10号墳実測図